

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530724

研究課題名(和文) プロシューマーが提供するサービスの意義および効果に関する包括的研究

研究課題名(英文) The Meaning and Effects of Prosumer-Provided Services: A Comprehensive Study

研究代表者

相川 章子 (AIKAWA, Ayako)

聖学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：60383303

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、実態調査、プロシューマーの意義および課題に関するグループインタビュー調査、ピアサポート講座を通してピアサポートの意義および効果に関する調査、アメリカにおける先進事例の視察、の4通り実施し、プロシューマーが提供するサービスの意義および効果について考察した。すべての調査より、「支援する・支援される」という固定的な関係性から有機的なダイナミクスへと転換し、新たな関係性の構築に影響をもたらすことが明らかとなった。ピアサポートはリカバリーの道を歩むきっかけとなり、多様なかたちで展開していく可能性をもつことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：I implemented four studies in the present project to examine the meaning and effects of prosumer-provided services: (1) a survey with self-administered questionnaire; (2) a group interview study about the significance and challenges of prosumers; (3) a survey on the meaning and effects of peer support through a peer support training program; and (4) a survey in advanced cases in the United States. The studies demonstrated that a static relationship of "the supporter and the supported" between stakeholders of prosumer-provided services is transformed to be more organic and dynamic in nature, triggering the construction of a new relationship. Thus, peer support has been shown to prompt the path of recovery and be of potential to develop in a variety of forms.

研究分野：社会福祉

キーワード：ピアサポート ピアサポーター ピアスタッフ プロシューマー ポジション 関係性 協働 経験的知識

1. 研究開始当初の背景

プロシューマーの動きの端緒は、1960年代以降に米国で展開された精神障害者の当事者運動にある。当時の米国は、公民権運動、女性運動、ゲイ・ライツ・ムーブメントなど、差別やスティグマに抗う権利主張運動が興隆する時代であり、精神保健領域においては、大規模な州立精神科病院の廃止の動きなどに代表される脱施設化の最盛期であった。そのような時代背景のなか、精神障害者自身による組織的な権利主張運動が始まり、1980年代には、当事者は自らを、主体的に治療サービスを選択する主体として"コンシューマー (consumers)"と呼び、自助グループや権利擁護団体の組織化、精神保健サービスの提供といった活動を展開し、精神保健サービスの"プロバイダー(provider)"の役割を担い始める¹。

コンシューマーがプロバイダーとなることの効果・影響についての研究は米国を中心に90年代から始められている。そこでは、クライアントがコンシューマーによるサービスを受けることで、症状や社会的機能、QOLの向上といった良好なアウトカムがもたらされること、コンシューマーがプロバイダーとなることで、自己効力感、自信、対処技能などが向上すると報告されている。さらに、入院の減少や、自助活動の活発化による、社会的コストの減少といった精神保健システムレベルでの良好なアウトカムが示され始めている²。また、コンシューマー・プロバイダーの全米組織が設立され、米国の一部の州では認定ピアサポートスペシャリストの職種が制度化されるなど、大きな注目を集めている。

日本でも、障害者自立支援法にピアサポート強化事業の項目が盛り込まれ、平成22年には厚生労働省により精神障害者の雇用促進を目的とするピアサポート体制奨励金制度が創設されるなど、コンシューマーのプロバイダーとしての活躍の機会が注目され広がりと同時に、このような政策的背景のなかで増加傾向にある。しかしながら、米国と異なる歴史的・文化的背景をもつ日本において、その効果の評価はもとより、実態も明らかにはなっていない。

平成20年から22年にわたりプロシューマーに関する文献調査を行い、その経過や概念整理を行ってきた。さらに、プロシューマーとして活動する日米52名に対し聞き取り調査を述べ116回実施し、その雇用主12名および支援者(同僚)9名に対してもそれぞれ17回および9回の聞き取り調査を実施した。その中で、支援の受け手と送り手の二つの立場(ポジション)を行き来するプロセスのなかの葛藤やエンパワメントの様子、その背景の社会的条件についての示唆を得た。当研究より、プロシューマーとは新たなポジションの創造であり、そのことがこれまでの伝統的な精神保健福祉システムからリカバリー志

向のパラダイム転換をはかる可能性をもつ存在であることが示された。しかしながら、日本におけるプロシューマーの意味、効果、現在の状況に関しては推測の域を脱することができない状況にある。

本研究が取り組むプロシューマーに関する包括的実証研究は今後の精神保健福祉領域において重要な示唆を与えるものであると考える。

1. Reaume G. Lunatic to patient to person: nomenclature in psychiatric history and the influence of patients' activism in North America. *Int J Law Psychiatry*. Jul-Aug 2002;25(4):405-426.
2. Solomon P. Peer support/peer provided services underlying processes, benefits, and critical ingredients. *Psychiatr Rehabil J*. Spring 2004;27(4):392-401.

2. 研究の目的

本研究の目的は、サービスの受け手(障害のある当事者)かつ送り手(サービス提供者)であるプロシューマーの実態を把握し、彼らの提供するサービスの包括的評価と、その意義および効果について実証的に明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、以下4通りの調査を実施し、プロシューマーが提供するサービスの意義および効果について考察した。

- (1) 「全国ピアスタッフの集い」を開催し自記式アンケート調査による実態調査
- (2) プロシューマーの意義および課題に関するグループインタビュー調査
- (3) ピアサポート講座をとおしてピアサポートの意義および効果に関する調査
- (4) アメリカにおける先進事例の視察

4. 研究成果

1) 調査結果

- (1) 「全国ピアスタッフの集い」を開催し自記式アンケート調査による実態調査

日本においてはプロシューマーが可視化されておらず、アンケートを郵送配布等で実態把握することは極めて困難であることから、プロシューマー同士が一同に会し、現状および課題について話し合う機会をもつことによって実態を把握することを試みた。

「第1回全国ピアスタッフの集い」を開催(2012年11月30日~12月1日、国立オリンピック記念青少年総合センター)し、そこに参加したプロシューマー63名の参加者のうち58名(回答率92.1%)による自記式アンケート調査を実施した。

アンケート調査で得られた主な結果として、呼称については「ピアスタッフ」が最も多く用いられている、雇用は2000年頃から盛んになり始めた、非常勤雇用が多い、仕事内容は多岐にわたっている、研修やスーパービジョンは不十分、ピアスタッフ

のネットワーク、普及啓発、資格化や制度化を求める声が多い、「全国ピアスタッフの集い」への評価は高く、継続的な開催を望む声が多い、という実態が見えた。

「第2回全国ピアスタッフの集い」(2013年12月14日~15日、聖学院大学)においては、参加者171名のうち53名(回答率31%)から回答が得られた。また、ウェブ調査については40名の回答が得られ、下記のような結果となった。

ピアスタッフの効果や意義として、「利用者の安心感につながる」とする利用者への効果、「支援者と利用者の距離が縮まる」とする支援者と利用者の双方への効果、「自分自身が元気になり成長できる」とするピアスタッフ自身の効果がそれぞれ挙げられた。

ピアスタッフの不安や困難、課題として、ほぼ昨年同様で、給与、報酬の未整備、研修やスーパービジョンの未整備などの環境的課題、利用者との距離などの支援に関する課題、ピアスタッフ自身のセルフケアの課題が挙げられた。

ピアスタッフの活動に将来必要なこととして、ピアスタッフの社会的認知、ネットワーク化、資格化や制度化が挙げられた。

ウェブでの記述式調査では、それぞれのピアスタッフが置かれている現状、本集いの意義、これからのピアスタッフへの期待、ピアスタッフを目指す当事者の思い、専門職としての思い等々多岐にわたるさまざまな意見が集められた。

これらの結果から、今後の課題として、ピアスタッフ同士の交流の場の必要性、ピアスタッフに関する情報収集および情報発信の必要性、本集いを継続していく必要性などにまとめることができた。孤立しているピアスタッフが多い現状ではピアスタッフ同士が出会える機会は希望と力を得る好機となっていることが記述式調査から明らかとなった。

(2) プロシューマーの意義および課題に関するグループインタビュー調査

「全国ピアスタッフの集い」の参加者のなかから各地から計35名のピアスタッフを対象にフォーカス・グループインタビューを3回実施した(2013年7月28日、9月15日、11月10日)。

また、福岡県福岡市内にある地域活動支援センターに勤務するプロシューマーによるグループインタビューを3回実施した(2012年6月24日、2013年4月7日、2013年11月4日)。

その結果、他の専門職等のスタッフとの協働、立ち位置のあいまいさ、業務や役割のあいまいさ、仕事量と収入の不安定さ、自らの健康管理、などが課題として挙げられるとともに、雇用機関によって多様であることも明らかとなった。

(3) ピアサポート講座をとおしてピアサポートの意義および効果に関する調査

新潟(3地域)、宮城(1地域)においてピアサポート講座を経年的に実施し、ピアサポート講座受講者および主催者のグループインタビュー調査を実施した。

その結果、当事者、家族、専門職者、ボランティア等が交じり合うグループのなかで「共に学ぶ」ことを体感し、このことが「支援する・支援される」という固定的な関係性から、有機的なダイナミクスへと転換し、新たな関係性、つまりピアサポートな関係性が構築されていることが明らかとなった。共時的な営みを通し、仲間同士でピアサポートグループの設立へと展開された事例、リカバリーの道を歩み始め就職もしくは復学へと至った事例、家族との関係性が良好になった事例、ピアサポーターとして活動を模索し始める事例、など多様な展開への可能性を示唆する語りを得た。

(4) アメリカにおけるピアスペシャリストの活動に関する先進事例視察

以下、それぞれの視察のなかで日本において最も参考となる事例について取り上げて報告する。

2012年8月26日~8月30日にかけて、カリフォルニア州ロングビーチにあるVillageおよびProject Return Peer Support Network(PRPSN)、LACDMH(Los Angeles County Department of Mental Health)等のプロシューマーの先進的活動を視察した。Villageでは多くのプロシューマーが活動、PRPSNは当事者運営組織である。PRPSNではロングビーチを中心にカリフォルニア州内に約1000のサポートグループを展開しており、それらのグループをプロシューマー約100名がファシリテーターとして運営している。100名のファシリテーターであるプロシューマーには研修およびスーパービジョンが整備されていた。

2012年8月30日~9月5日にかけて、ウィスコンシン州デー郡マディソンにおけるプロシューマーの活動を視察した。「リカバリーデー」は、2010年に創設された認定ピアスペシャリストの制度化後に設立された事業で、ピアスペシャリストのためのピアスペシャリストの機関としてコーディネーションおよびハブ的役割を担っている。また市内に点在するケースマネジメントチームの一つBlack Smithにチームの一員として認定ピアスペシャリストが二名活動しており、訪問活動に同行させていただきピアスペシャリストの実際の活動について視察した。

また、認定ピアスペシャリストの制度化後に、ピアスペシャリスト自身がピアスペシャリスト同士のピアスーパービジョン的なグループを立ち上げており、それに参加し、雇用環境および実践的課題について示唆を得た。

2012年9月5日～9月8日にかけては全米ピアスペシャリスト協会(NAPS)の全国会議に参加した。全米のピアスペシャリストが一同に会し、基調講演等の他23のワークショップのなかで最新の議論がなされていた。特に全米においてリカバリー志向への変革を実現するためには専門職者の教育が必要であると、その方法として「プロシューマー自身がリカバリーの証拠です(I'm The Evidence; ITE)」を合言葉にプロシューマーが講師となって展開する試行事業のための講師養成研修を模擬的に実施する分科会に参加し、リカバリー志向へと変革するためのアメリカでの最新の取り組みに触れた。

2013年1月6日～13日にかけて、全米に先駆けてピアスペシャリストという資格制度を構築したニューヨーク州におけるプロシューマー活動を視察した。Behavioral Health Center Kings County Hospital Centerのピアスペシャリストおよびスーパーバイザーへのインタビュー、制度創設者へのインタビュー、また、ピアスペシャリストの養成校である「Howie The Harp(HTH)」にて、インターンシップのフォローアップグループに参加するとともに、所長やプログラム担当者等にインタビューを実施し、ピアスペシャリストの創設の経緯、養成プログラムとその体制、活動およびスーパービジョンの実際について把握した。ブルックリンACTチームのミーティングおよびグループ活動およびACTにおけるピアスペシャリストの訪問活動に同行するなど、ACTにおける活動の実際を視察し、チームの中で活動するピアスペシャリストの現状と課題について示唆を得た。

アメリカにおける各地の先進事例の視察から、プロシューマーという新たな職種を既存のシステムに取り入れていくためには、プロシューマーという新しいポジションを、システム全体として創生することが必要であり、そのための雇用環境づくり(チーム支援体制構築、研修およびスーパービジョン体制の構築、職域拡大等)それによりシステム全体をリカバリー志向へと転換していくことを前提としていることが重要でありかつ課題となっていることの認識を得た。

(2) 考察および結論

プロシューマーの意義および効果について、本研究より以下のことが考察された。

日本において2000年頃から雇用が盛んとなったプロシューマーの雇用の状況、形態、置かれている環境や状況、業務内容等は多岐にわたっていること、また一人職場で働くプロシューマーも多く、ポジションや役割等のあいまいさのなかで悩んでいる者も少なくないことがわかった。

プロシューマー同士の情報交換や共有のできるネットワークの必要性とともに、集まったプロシューマーが自らのあり方を検討し、まさにこれからの日本におけるプロシ

ューマーポジションおよび取り巻く環境を創造していく必要性が明らかになった。

「プロシューマーになる」までのプロセスのなかで、「自らの経験を語り他者のリカバリーを促進する」という固有の機能を有効に発揮するための学びの場は、日本においては非常に少なく、加えて「プロシューマーになってから」のスーパービジョンをはじめとする学びの場も少ないなかで、二重関係や役割葛藤等の課題を抱えながら効果を発揮することが困難となっていることが明白となった。

プロシューマーの存在は、固定された二元論的・一方向的関係性から有機的・双方向的関係性への転換を導く役割をもち、それらは自由な位置取りを可能とする心地良い関係性構築を導いていることが明らかになった。

アメリカの先進事例からは、研修およびスーパービジョンシステムの構築は、プロシューマーが本来の効果を発揮するための重要な要素となっていることが示唆された。

プロシューマーの意義および効果が発揮されるための前提となる環境要件が整備されたと仮定した場合、彼らは利用者へのリカバリーの促進のみならず自身のリカバリーが促進され、それにより共に働く専門職者をリカバリー志向へと変革する力をもち、それによって組織文化をも変革する可能性をもっていると推察された。

さらに、ピアサポート文化を地域の中で醸成することによって、障がいの有無をはじめ多様な人々を尊重しあう、共に暮らす街の創生につながるのではないかと仮説を得た。

(3) 今後の研究課題

本研究においては、プロシューマーへの調査を中心に行ってきた。今後は利用者への調査を実施し、プロシューマーの効果等についてさらに深めた研究を行っていくことが課題である。

また、プロシューマーの機能には、ピアサポート、権利擁護、働くということの主に3つの流れの中で生成されてきており、これらの機能を一つ一つ解明していくことで、プロシューマーの効果が発揮されるメカニズムが明らかになると考える。次年度以降は、そのうちのピアサポートについて、包括的かつ実証的研究に着手する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- (1) 相川章子、ピアスタッフ・ピアサポーターへの期待、ゆうゆう、査読無、第59巻、2015、pp.28-32
- (2) 相川章子、ピアスタッフの現在と未来 - 日本の精神保健福祉の変革を目指して -、精神医療、査読無、74巻、2014、pp.36-45
- (3) 相川章子、佐々木禎司、ピアサポートを

活かした協同労働（ピアサポートセンターそら）協同の発見、査読無、248 巻、2013、pp.44-52

- (4) 相川章子、アメリカの実践例（特集『『ピア』が拓く新しい支援』第 4 章ピアサポート活動の始め方・進め方 - 5 ）、精神科臨床サービス、査読無、第 13 巻第 1 号、2013、pp.123-129
- (5) 相川章子、ピアサポートってなんだろう？～協会活動はまさにピアサポートの実践（特集；ピアサポートってなんだろう）波、査読無、第 36 巻第 11 号、2012、pp.324-329
- (6) 相川章子、プロシューマーと専門職との協働～日米のインタビュー調査から～（連載；リハビリテーション関係論への招待 第 11 回）、精神療法、査読無、第 38 巻第 4 号、2012、pp.537-547
- (7) 相川章子、ポジション理論から捉えるプロシューマー（連載；リハビリテーション関係論への招待第 10 回）精神療法、査読無、第 38 巻第 3 号、2012、pp.385-395
- (8) 相川章子、プロシューマーの歴史と動向（連載；リハビリテーション関係論への招待 第 9 回）精神療法、査読無、第 38 巻第 2 号、2012、pp.253-264

〔学会発表〕(計 7 件)

- (1) 磯田重行、相川章子、今川亮介、川村有紀、竹内政治、ピアスタッフの今とこれから、リカバリー全国フォーラム、2014 年 8 月 29 日～30 日、帝京平成大学（東京都・豊島区）
- (2) 長岡千裕、相川章子、原田幾世、ピアサポートが育まれる「場」づくりからみえたもの～ともに学ぶことを通じて～、日本精神保健福祉士学会、2014 年 5 月 19 日～21 日、大宮ソニックシティ（埼玉県・さいたま市）
- (3) 相川章子、園環樹、ピアスタッフの活動の実態に関する調査～第 1 回全国ピアスタッフの集い参加者の声～、日本精神障害者リハビリテーション学会、2013 年 11 月 28 日～30 日、沖縄コンベンションセンター（沖縄県・宜野湾市）
- (4) 相川章子、児玉洋子、二通じゅん、栗原浩之、ピアサポーターに必要な養成システムの構築～上尾市における試行的取り組み～、日本精神保健福祉学会、2013 年 6 月 28 日、ラフレさいたま（埼玉県・さいたま市）
- (5) Ayako Aikawa, Naoko Yasui, Claming the Prosumer Identity in Japan and US: Toward a Paradigm Shift Initiated by Provider-Consumer of Mental Health Services, Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, 2013 年 4 月 27 日～5 月 1 日、Hawaii Convention Center (Honolulu・U.S.A.)
- (6) 相川章子、精神保健福祉領域におけるプ

ロシューマーの可能性と課題、日本精神保健福祉学会、2012 年 6 月 29 日、北星学園大学（北海道・札幌市）

- (7) 相川章子、精神保健福祉領域におけるプロシューマーの可能性、第 35 回社会福祉のフロンティア（招待講演）2012 年 5 月 29 日、立教大学池袋キャンパス（東京都・豊島区）

〔図書〕(計 7 件)

- (1) 石川到覚、岩崎香、北本佳子、相川章子、他、新泉社、社会福祉 実践と研究への新たな挑戦、2015、pp.192
- (2) 相川章子、伊澤雄一、他、中央法規出版、障害者地域移行支援・地域定着支援ガイドブック、2013、pp.154
- (3) 相川章子、中央法規出版、精神障がいピアサポーター - 活動の実際と効果的な養成・育成プログラム、2013、pp.302
- (4) 相川章子、大正大学出版会、精神保健福祉領域におけるプロシューマーに関する研究、2013、pp.274
- (5) 野中猛、相川章子、他、中山出版、看護に必要な精神保険制度ガイド第 3 版、2012、pp.276
- (6) 大西良、相川章子、岩崎久志、下田学、茶屋道拓哉、辻丸秀策、西原尚之、藤島法仁、松澤秀樹、末永和也、山崎千香子、米川和雄、へるす出版、精神保健福祉士のためのスクールソーシャルワーク入門、2012、pp.237
- (7) 柏木昭、中村磐男、助川征雄、田村綾子、相川章子、聖学院大学出版会、ソーシャルワーカーを支える人間福祉スーパービジョン、2012、pp.274

〔その他〕(計 4 件)

(報告書)

- (1) 相川章子、「第 2 回全国ピアスタッフの集い報告書」、2013、pp.53
- (2) 相川章子、「ピアスタッフ活動に関する調査報告書」、2012、pp.28

(ホームページ等)

- (3) 「ピアスタッフの活動に関する調査報告書」
<http://psilocybe.co.jp/wp-content/uploads/peer2012.pdf>
- (4) 「第 2 回全国ピアスタッフの集い」報告書
<http://peer2014.tumblr.com/2013>

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
相川 章子 (AIKAWA Ayako)
聖学院大学・人間福祉学部・教授
研究者番号：60383303